巻頭特集 多賀大社の最重儀 古例大祭

総勢600人 絢爛豪華な時代絵巻

「お多賀さん」の名で親しまれている多賀大社。例年4月22日に行われる古例大祭は、多賀大社の年間行事のなかで最も重要な祭儀である。「多賀まつり」とも呼ばれ、時代衣装を身にまとった大行列が多賀のまちを練り歩く。その華やかさ、盛大さは湖国の春祭り第一の名にふさわしく、当日は多くの見物客でにぎわう。

祭祀の主役を務める馬頭人と御使殿の二役

古例大祭の起源は不詳である。現存する文書で最も古いのは鎌倉時代中期、文永6（1269）年の『六波羅下知状』に、多賀大社の例祭の記載が見られる。その後の記録からも、鎌倉時代にはすでに壮麗盛大に行われていたことがうかがえ、祭りの起源は王朝時代にまで遡ることができそうだ。

当時、祭祀の執行は鎌倉幕府の御家人、多賀氏が当たっていた。のちに河瀬氏が加わったが、盛大な祭りゆえに経費もかさみ、2氏だけでは費用をまかないきれなくなる。そこで設けられたのが「座」であった。

座には「氏座」と「郡座」があり、氏座は多賀氏、河瀬氏を含めた、犬上郡内の幕府御家人によって組織された。衆議を行い、大社の運営や祭りの執行を担った。なかでも祭りの主役ともいうべき馬上役を「御使殿」といい、多賀氏が務めていた。郡座は各村の土豪らが集まった座で、氏座よりも少しあとにつくられた。ここからも馬上役として祭りに奉仕する者が選ばれた。それを「頭人」といい、今日では「馬頭人」と呼ぶ。

両人の選出は、現在において次のようになっている。御使殿は多賀大社の氏子である地元の村々から選ばれるのだが、御使殿を出す村は輪番制となっている。一方、馬頭人は彦根市を含む旧犬上郡を8区域に分け、同様に輪番制による当番区域のなかから選ばれる。

かつては莫大な金額を上納して、馬頭人の役に就いたとも伝えられており、近世にあっても馬頭人の選定には厳格な条件が設けられていた。敬神の念が篤く、富豪で名望があり、家格が高く、夫婦が揃っていること。この5つの条件にかなった3人をまず選び出し、くじ（神籤）により馬頭人を決めるしきたりだった。戦前まで続けられていたそうだが、現代では「富豪」「家格」「夫婦」の条項が削除されるなど、条件などが緩やかになった。

馬頭人と御使殿に内定した2人は1月3日に社参し、差府を渡される差定式にて役を正式に申し渡される。4月に入ると御注連張式、神様を迎え入れる御神入式、神様に供物を奉献する大御供式などの古例大祭に関わる神事が続く。馬頭人についてはこれらの神事を行う日にちが決まっているが、御使殿は高校生が役を務めることが多いため、中旬の日曜日を選んで行われる。また、馬頭人に限っては古例大祭の前日、大社に参籠し、身を清めて祭りに臨む。そして大祭後、4月26日（御使殿は4月22日以後の日曜日）に執り行われる御神上式、御注連上式を経て、馬頭人と御使殿それぞれの祭儀奉仕が終わる。

古式に則って神事を斎行し五穀豊穣を祈る

古例大祭日が4月22日とされたのは明治18（1885）年、多賀大社が官弊社に昇格以来のことで、かつては午の日に執行されていたと記録に残る。以前は初午の日（2月最初の午の日）に、馬頭人と御使殿が神事の無事奉仕を祈願する儀式が行われていたり、大御供式には走馬式の神事があったりと、何かと馬とゆかりが深く、多数の騎馬が祭りに供奉されることからも「馬まつり」の別名を持つ。

当日は本殿祭が午前8時半から始まる。10時になると、氏子や崇敬者の騎馬、神輿や鳳輦の供奉者などが列次を整え、栗栖の「調宮」へ向かう渡御の大行列が出発する。馬頭人と御使殿は別途、彦根市竹ヶ鼻町の都恵神社へ車で行く。同社で拝礼、祭典を終えると、賓台河原（都恵神社前の犬上川河原）で御幣合わせの神事を斎行する。次に犬方町の国府君神社を拝礼する。農耕が盛んな犬上郡において水は大切なもので、その水源のひとつ犬上川を挟んで鎮座する両社への参拝は、地域の五穀豊穣、さらには平安と発展を祈願するものであったと思われる。

神事を奉納した馬頭人と御使殿は多賀大社に戻り、調宮への渡御一行の還りを待つ。午後2時頃、大社前で行列と合流して尼子の御旅所、打籠馬場へ向かい、同所で「富ノ木渡し式」を行う。富ノ木はカツラの小枝で、カツラの木は水の豊かな湿原に自生するため水を表すとされ、その力をもって豊作を祈ったという。

午後3時半頃、尼子を出立して一行は大社へと還る。これが古例大祭最大の見どころ「本渡り」と呼ばれるもので、総勢600人にも及ぶ大行列は豪華絢爛で、春色に包まれた多賀のまちをにぎやかに進む。大社に到着後は「夕日の神事」が斎行され、古例大祭は終了となる。

大和舞の早乙女や武者姿の随身、2基の子供神輿など、地域の子どもたちの参加も多い。多賀大社の禰宜で、例大祭の運営を担う祭儀部に所属する片岡秀和さんは「多賀まつりと呼ばれるように、古例大祭は地域をあげてのお祭りです。このお祭りによって氏子の方々、地域の方々の心がひとつになるのです」と祭りの意義を話し、だからこそ受け継がれてきた伝統の祭りを後世に伝える努力が大切という。

神輿の担ぎ手は、氏子のなかで25歳と42歳になる厄年の男衆。
本渡りから大社前に戻ってきたとき、鳳輦とともに太閤橋を威勢良く渡る姿は見ものである

右）尼子の御旅所には斎竹（いみだけ）が立てられ、騎馬が整列するなか、粛々と「富ノ木渡し式」が行われる。

左）「富ノ木」はカツラの木の小枝で、豊作を祈るしるし。馬上にて宮司から馬頭人、御使殿に渡され、冠にかざす

1.神輿や鳳輦（ほうれん）の屋根に飾られた鳳凰にも、調宮神社にて「富ノ木」が付けられる
2.柔らかな春の日差しのもと、古き良き多賀の街中を神幸行列は進む　3.午後2時頃、馬頭人・御使殿と合流した神幸行列には、多賀観光協会のささゆり娘の女武者や、毛槍を振り歩く奴、児童が扮する騎馬随身なども加わり、より一層華やかさを増す
4.鳳輦（ほうれん）は、現代では神社の祭事などにも用いられるが、もともとは高貴な方が乗る車のことを指す。担ぎ手は前年に神輿を担いだ者が中心となっている

多賀大社の禰宜、片岡秀和さん

information 多賀大社　犬上郡多賀町多賀　☎0749-48-1101（代表）　http://www.tagataisya.or.jp

文／長屋整徳　写真／多賀大社提供、中村崇人　デザイン／chica